



マリンマリン！

天露

小海汀は甲板の上を行ったり来たり忙しく動いていた。手にはデッキブラシを持っている。ひよんな事からこの少し風変わりな『海賊船』に乗る事になった彼女だったが、一ヶ月も経てば慣れてくるもので。広い船の上で船員達が思い思いに色々と間違った方法で寛いでいようと何も感じなくなっていた。目の前では干された布団のような状態で手すりに副船長ことアーロンがぶら下がっている。

「おーい、汀ちゃん。何か今日、船長が話しあるってさあ」

不意に肩を叩かれて振り返る。今までどこに隠れていたのか、船員の一人であるバッカスが締まりの無い笑みを浮かべて立っていた。彼は船内で一番ファッションセンスがあるのだが、頭の中は空っぽで常にサボる場所を求めて船内を徘徊している。

そんな彼からの伝言に頷いた汀はデッキブラシが倒れないよう壁に立て掛けると船室へ足に向けた。あまり広くないのだが、船長であるブランドンが選んだ数十人だけが朝礼に出席するので問題は無い。ちなみにランダムチョイスだ。

バッカスと共に船室へ行くと、すでにほとんどの人数が揃っていた。何人か見掛けないが、たぶん連絡が行き届いていないのだろう。よくある事だ。

「あれ・・・」

「んー？どうしたの？」

船長の隣に副船長が立っているのを見て目を丸くする。彼は確か、さっきまで手すりに引っ掛かって眠っていたはずなのだが。そういうところはしっかりしているのかもしれない。

「諸君、おはよう」

朗々とした声が響き渡った事で汀は我に返った。船長はそれなりに高齢で60代を過ぎている。そして――

「今日も眩しいなあ、頭」

「シッ！馬鹿！聞こえたら大変だよ」

彼の頭には髪が無い。そう、ハゲているのだ。長年海に繰り出しているせいで黒くなった肌も相俟ってパチンコ玉に見える。海でカツラを着けるのは無謀だったからかそのまま放置されているが、汀は知っている。彼が髪、ハゲ、という言葉に酷く敏感な事を。

その間にも話は進んでいく――

「――というわけで、この島には上陸出来ん。期待させておいてすまないが、儂も後ろ髪を引かれる思いだ」

「お言葉ですが、船長」

ここで不意にアーロンが口を挟んだ。眠そうな目で自分の上司を見ている。「ふむ、どうした副船長」、と部下の横槍を咎めること無くブランドンはそう問うた。

そうして彼はどこまでが本気で或いはどこもまでも冗談のように言う。

「船長、貴方の頭に髪はありません。よって、貴方が使う「後ろ髪を引かれる思い」という言葉には説得力が無いかと」

――何てこと言ってんの！？

一瞬後、自分の口があぐりと開いている事に気付いた。アーロンの一言により私語が目立つ朝礼の場に静寂が訪れる。

さすがのブランドンも一瞬何を言われたか理解出来なかったようだが、次の瞬間、彼は冷静さはそのままに爆発した。

「そうか、表へ出るアーロン。貴様のその長い髪で儂用のカツラでも作ろうか」

「風が強いのですから、カツラなんて着けてたら飛ばされますよ」

至って真面目にアーロンがそう答える。刹那、何の脈絡も無く副船長は船長に背を向けるとそのまま駆けだした。一瞬遅れてブランドンがそれに続く。

「うわっ、濃・・・っ！」

67歳と27歳がする全力の鬼ごっこを見て吐き気を催したのは言うまでも無い。

この船に乗っている彼等は失った「大切なもの」を探しているらしい。

それは小海汀が船に乗り込んで一週間目にして知った事実だった。失ったものを見つける為、航海しているのだと。

当時、少なからずこの船員達がまともに見えていた汀は「そうなんだ・・・」と柄にもなく感傷に浸ったものだ。今思えば人生で一番無駄な時間だったと反省している。

ともあれ、当時の汀は事の真偽を確かめるべく医務室を訪れていた。強面の船医、セドリックの領域だが彼はそれなりにまともな人間だと認識していたのだ。それに、怪我はしても馬鹿だからか風邪や病気にはならない船員達がこの部屋にいる事は少ない。それも汀が気兼ねなく医務室を訪れられる理由の一つだった。

「そういうわけなんですよ、セドリックさん。あなた達が探してる「大切なもの」って何なんですか？」

「・・・大切なもの、か」

神妙に頷いて見せた彼はミルクたっぷりのコーヒーを汀に手渡ししながら何かを思案しているようだった。

「一つ聞くと、君はその話を誰から聞いたのかね？」

「船長です」

「ブランドンさんか・・・」

「やっぱり、私には話せない事なんですか？さすがに入って一週間の私なんかには・・・」

「えっいやそういうわけじゃなくてだな」

目を逸らされる。ややあってセドリックは小さく溜息を吐いた。

「人それぞれじゃないのか？」

「あれそんなテキトーなんですか」

「そうだな、私は一一時間、だろうがな」

何だかこれ以上聞いてはいけないような気がした。ので、コーヒーを飲み干し立ち上がる。幸い、船員はたくさんいるのだ。他の人間にも訊いてみればいい。

続いて出会ったのはまだ17歳の少年、ダリルだ。と言っても汀とあまり年齢差は無いが平均年齢が高いこの船にいると彼は随分若く見える。方位磁石を見ていた彼は汀が近付くと微かに顔を上げた。

比較的常識人でまとも、さらに歳も近いという事で汀は彼に友好的だった。根が良い人だからかもしれない。

話を聞く姿勢を見せたダリルに今日あった話を聞かせる。黙って聞いていた彼は一つ頷くと問

うた。

「それで、俺に何を訊きたいの？」

「君の大切なものって何？」

「大切なもの？ そうだなあ・・・」

ふっ、とひどく遠い所を見つめたダリルはやや難しい汀の問いにこう答えた。

「大切なものとは違うかもしれないけれど、必要なものならあるよ。俺個人のものじゃなくて、船に乗ってる奴全員に言えることだけだ」

「え？何それ凄く知りたい」

「俺達に必要なものは――常識、かな」

視線の先では副船長が船酔いを訴えている。

今日も船内は平和だ。

なお、後日騙されたと知りセドリックの医務室へ押しかけた。すると船医は「いや、ブランドンさんには頭が上がりなくてな」と笑いながら謝ってきたがあいつだけは絶対に許さない。紛らわしい事しやがって。

小海汀が副船長ことアーロンを変人奇人として認識したのは入船から5日目の話である。この日は本当に色々あって、とりあえず今まで生きて来た18年間の価値観はたった24時間やそこらの間で塗り替えられたと言っていい。

良く晴れていてしかも風。波があまり高く無く、快適な船旅を満喫していた。

――1分前までは。

「ちょ、大丈夫ですか!？」

目の前を横切っていった副船長、アーロンがいきなり倒れた。それはもう何の脈絡も無く唐突に。さすがに驚いて顔を覗き込むと真っ青だった。あ、これはヤバイなと瞬間的にそう感じた汀は辺りを見回す。

――誰もいない。何で甲板に自分1人しかいないんだ。

医務室には船医がいたはずだ、と立ち上がる。しかし、思った以上に強い力で腕を掴まれた。言うまでも無くアーロンだ。「あれ意外と元気かもしれないな」、そう脳内を整理する前に彼の方が口を開く。

「すまん……。――を、持っていないだろうか？」

「はい?ところどころ声が聞こえないんですけど」

――いや、正確にはちゃんと聞こえていた。が、あまりにも突拍子の無い事を言うので聞き間違いだと思ったのだ。というかそうであって欲しかった。

しかしそんな汀の思いは当然の如く氷か何かを砕くように粉々に砕かれる。

「ウイスキーの瓶を持っていないだろうか」

「・・・持ってませんけど」

何を言っているんだろうこの人は。ちょっと理解出来なかったが——いや、何も理解出来ない。何でこの人は倒れた状態のまま酒を所望しているのだろうか。というか、倒れた原因は結局何なんだ。

「それよりも、大丈夫なんですか？医務室まで連れて行きましょうか？」

「ああ、すまない」

「ちょっと、待っ——」

肩を貸してやろうか、とそう訊いたはずなのにアロンはケロツとした顔で立ち上がるとさっさと歩いて行ってしまった。これは自分必要ないんじゃないだろうか、とも思ったが医務室へ連れて行く約束なので抗議の声を封じ込めて後に続く。

医務室へ行くとセドリックが退屈そうに消毒液を弄り回していた。ツンとした臭いが鼻につく。

「どうした、汀のお嬢さん」

「その、お嬢さんって言うの止めてくれませんか。えっと、用事があるのは私じゃなくてアロンさんです」

やはり顔が青い彼。副船長を視界に入れて船医は首を横に振った。呆れているようだ。

「また船酔いか、アーロン」

「ああ。今日は波が無くて余計にな」

「揺れている時も酔っているだろう、お前は」

「そうだったか？」

——副船長なのに船酔い！？

何かの冗談だろう、とセドリックとアーロンの顔を交互に見る。しかし、彼等は至って真面目だった。

「酔い止めを飲んだが、効かなかった。貴方は私に不良品を渡したのではないか？」

「水で飲んだか？」

「ああ。ちょっとアルコールが混ざっていたが」

「酒で飲んだのか？そりゃ・・・効かないだろうよ・・・」

ああ、大丈夫だろうかこの船。

いつか沈む気がしてならない今日この頃。

